

ラグビー早慶戦・早明戦の入場者数増減の傾向と分析

1K03A119-1

氏名 須藤 明洋

指導教員 主査 間野義之

先生 副査 中竹竜二 先生

1. はじめに

私が通学路にあったグラウンドでラグビーに偶然出会ってから14年がたとうとしている。小学校から何気なく始めたラグビー。このラグビーとの出会いが会ったからこそ今の私があるのだと思う。高校、大学とラグビーを最優先に考え、進学もしてきた。今年は、学生でラグビーをプレーすることが最後で、私のラグビー人生の中でも区切りの年だと思う。卒業論文を手がけるにあたっても、私はラグビーを切り離すことは出来ないと考えた。

そこで、今プロ化やトップリーグの開始といった過渡期にある日本ラグビーの入場者数を少しでも増加させるために、早慶戦・早明戦を手がかりにどんなときに、どんな試合に人が入っているのかを調べてみたい。

2. ラグビーについて

まずラグビーとはいかなるスポーツなのか。ラグビーは15対15で行われるスポーツであり、漢字で表記すると「闘球」となるほど激しいスポーツである。

ラグビーの発祥は、ラグビー校のエリス少年が、それまでプレーされていたフットボールのルールを見事なまでに無視し、初めてボールを腕に抱えて走ったことに由来する。その伝説が発祥とされている。

3. 日本のラグビー

1899年、横浜生まれの英語教師エドワード・クラークが慶應義塾の学生にラグビーを教え始めて一世紀。人気の浮き沈みはあったが、現在ではジュニアからシニアレベルまで含めると約4800チームが、日本のいたるところでボールを追いかけている。

日本ラグビーは今過渡期にたたされている。世界のプロ化の波に置いていかれた形でスタートしたトップリーグをはじめ、社会人・大学生ともに入場者数は伸び悩んでおり、プレーの質としても日本代表はワールドカップでまだたった1勝しかしていない。

なんとかその差を解消するために各チームが外国人コーチを招聘したり、クラブの組織をシステム化したりしている。そして、今現在はそういうことに積極的なチームが結果を出しているといえる。

関東の大学ラグビーは他の地域で一般的に行なわれる

総当たり戦とは異なり、対抗戦思想と呼ばれる理念を下にした総当たり戦ではない相互間で認め合った相手（毎年、シーズン前のマネージャー会議にて決定）とだけ試合を組んで行なうといった試合形式で行なっていた。

そして紆余曲折あったものの、参加大学の数が増えたことによって対抗戦とリーグ戦に分裂し、今にいたる。

4. ラグビーの入場者数

社会人ラグビーと大学生のラグビーの入場者数を比較すると、あらゆる面で大学ラグビーが凌駕している。その大学ラグビーの中でも「早稲田大学 VS 慶応大学」「早稲田大学 VS 明治大学」の2試合は入場者数の点で群を抜いている。そこで、この2試合に絞って入場者数の推移を、対戦前の戦績と絡めて分析していきたい。

5. 早慶戦と早明戦の入場者数の推移と分析

早慶戦・早明戦ともに、対戦前の戦績が悪いこと、つまりどちらかがすでに2敗～3敗して優勝争いから脱落していたり、もしくは両校共に黒星がついたりしている状態で始まる早慶戦・早明戦が2年以上続くと確実に入場者数は減少していく。だからといって、全勝対決だったり、優勝決定戦であつたりといったことがその後2年以上続いても元の水準にまで戻ることにはなかった。

またその他の入場者数を変化させる要因としては、消防法の改正であつたり、チケットの値上げであつたり、人気スタープレイヤー、監督の存在であつたりとたくさんあったのだが、結局早慶戦・早明戦の人気を復活させる、ひいては日本ラグビーの人気を復活させる鍵は、早稲田・慶応・明治が常に安定した力関係を持ち、安定した好試合を続けることということがわかった。